

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年6月25日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24 (土)～6.8 (日) ピアノ部門 2025.6.14 (土)～2025.6.29 (日)

第9回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門レポート

セミファイナル (6月20日～6月22日) レポート 音楽ジャーナリスト：恒川 洋子

第9回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門のセミファイナルが、6月20日から23日にかけて日立システムズホール仙台で開催された。

仙台国際音楽コンクールの白い垂れ幕に映える朱色のロゴと楽譜は、仙台ゆかりの詩人・土井晩翠にちなみ、瀧廉太郎作曲「荒城の月」の譜面がモチーフとなっているという。Steinway、Yamaha、Shigeru Kawaiの3台のピアノが用意され、各ラウンドごとに演奏者が自由に選択できる。

セミファイナリスト12名の年齢は、11歳から28歳までと幅広い。

国際紛争が広がる昨今、出場者の国籍をプログラムから削除する国際コンクールも増えているが、今回、久しぶりに国籍が記載されたコンクールのプログラムを手に取り、平和で温かく、どこか懐かしい空気を感じた。それは、青々とした緑に包まれた仙台の街と、そこに暮らす人々の姿を象徴しているようにも思えた。

「いまや年齢や国籍に大きな意味はありません。本当に重要なのは、演奏の中に誠実さ、純粹さ、そして謙虚さがあるかどうかです。これらの資質は、隠そうとしても隠せないものであり、音楽そのものに表れます。演奏とは、意識的な表現であると同時に、無意識の自分自身をさらけ出す行為でもあるのです」とキム・デジン先生は語る。

セミファイナリストたちは、技巧、音楽的深さ、そして「歌う」感性が求められるモーツァルトの中期の傑作ピアノ協奏曲 (K450、451、453、456、459) の中から1曲を選び、仙台フィルハーモニー管弦楽団と、熟練の指揮者・高関健氏とともにステージに臨んだ。

「面白いことに、選曲にも“流行”があります」と語るのは、レナ・シェレシェフスカヤ先生。今年はK453 (ト長調、第17番) を7名が選び、そのうち4名がファイナルに進出した。

初日にこの“17番”を演奏した島多璃音さん (兵庫県・24歳) は、細部まで神経の行き届いた繊細な演奏ながらも、自由で個性的なアプローチを見せた。第一楽章アレグロ冒頭から鮮烈な印象を残し、まるで上から糸を引き下ろしてくるような表現、対話を楽しんでいるかのようにでありながら、内面的な自問自答のようにも聴こえた。第二楽章アンダンテでは、オーケストラとの対話を美しく叙情的に表現。ややゆったりしたテンポで入りつつも、自然に変化し、絶妙なペダリングで息の合った演奏を聴かせた。第三楽章アレグロ・プレストでは、華やかかつユーモラスな表現で、速いテンポの変奏を軽快に弾ききり、豊かな音色と個性が際立った。

裏面に続く。



同日演奏したエリザヴェータ・ウクラインスカヤさんも「この曲を絶対に弾くと決めていた」と語る。サンクトペテルブルク音楽院出身らしい澄んだ音色。第一楽章アレグロは時にオーケストラより速く感じる場面もあったが、テンポ感とバランスは良好で、室内楽的な響きも充実していた。第二、第三楽章は非常に整っており、経験の豊かさを感じさせた。

二日目には三者三様の“17 番”が続く。キム・ドンジュさんは第一楽章をかなりゆっくりとしたテンポで入り、思索的な演奏に感じられた。第二、第三楽章で期待された「歌」や「音色」が現れた。

アレクサンドル・クリチコさんは、第一楽章でオーケストラとの生き生きとした対話が印象的だった。第二楽章アンダンテは透明感のある音色と余韻。第三楽章は「歌」が際立ち、オーケストラとのバランスもよく、プレストの名の通り駆け抜けた。

小野寺拓真さんは、やや速めのテンポで第一楽章を始めたが、オーケストラとの呼吸が合ってから自然な音色と微妙なテンポ感でリード。カデンツァも華やかに表現された。第二楽章は繊細で美しく、静寂さが伝わる。第三楽章も軽快なテンポで締めくくった。

最終日、“17 番”を演奏したジョシュア・ハンさんの第一楽章は明るく整った音色。オーケストラとの軽やかなやり取りが忙しくも生き生きと聴こえた。第二楽章は今回のセミファイナルで特に印象的な場面の一つ。語りかけるような深みと静かな哀感が漂う演奏だった。第三楽章も充実した音色で、速さの中にも落ち着きを保ち、オーケストラとの対話を存分に楽しんでいるように聴こえた。

セミファイナル最後に登場した天野薫さん（東京・11 歳）は、全身を使った迫力のある“17 番”で舞台を締めくくった。第一楽章は明るく若さあふれる速いテンポで、カデンツァも軽やかに爽快。第二楽章では一音一音に感情を込めて深呼吸するような姿が印象的だった。第三楽章は歯切れ良く、多彩な変奏も軽快に奏でられた。

デイヴィッド・チョエさんは、モーツァルトのピアノ協奏曲へ長調 K459 を選んだ。第一楽章は速めのテンポながらも堂々と、自然で安定感のある演奏。第二楽章アレグレットは優雅で、右手の「歌う」パートも表情豊かに美しく響いた。第三楽章アレグロ・アッサイは躍動感に富み、多彩な音色を巧みに使い分け、英雄的なカデンツァで締めくくった。

ペ・ジヌさんは変口長調 K456 を選曲。第一楽章アレグロ・ヴィヴァーチェは深みと素直さ、美しい音色が魅力で、テンポと構成に個性があった。第二楽章はニュアンス豊かで、品格と繊細さ、音の広がり印象的。第三楽章はオーケストラとの掛け合いが見事で、リズム感とスピード、遊び心を感じる演奏だった。

ユリアン・ガストさんはへ長調 K459 を演奏。「弾かれる機会の少ない協奏曲だが、特別な想いがあって選んだ」と語る。第一楽章は張りつめたような緊張感。テンポは速めで、カデンツァはあっさりとしていた。第二楽章は落ち着いたエレガントな演奏。第三楽章では再び勢いを取り戻し、輝かしいロンドを奏でた。

ヤン・ニコヴィッチさんは変口長調 K450 を選び、「ぜひこの曲を弾きたかった」と語った。第一楽章ではオーケストラとの丁寧な対話が聴かれた。第二楽章は優美にまとまり、カンタービレが際立った。第三楽章は軽快なリズムの中で、両手の掛け合いが軽やかにまとめられた。

セミファイナルでは、モーツァルトの協奏曲を通して演奏技術だけでなく、音楽に対する真摯な姿勢や、演奏者それぞれの内面がにじみ出る瞬間が随所に見られた。モーツァルトの音楽は個性を映し出す鏡であり、聴衆はその中に、音楽が持つ力と人の魅力の多様さを再発見するチャンスなのかもしれない。